

枝垂れ桜は三百年

教授 下村 研一

兼松記念館前の枝垂れ桜は、春の六甲台キャンパスの名物だ。神戸商業大学卒業生の笠松齊氏(元京都相互銀行社長)から1984年に寄贈されたそうだ。研究所でも毎年4月の教授会の後、降るように咲く桜の前で教職員の記念撮影をするのが恒例行事である。ところが、この桜、二度引退し二度復活している。一度目は私が所長になった2010年4月(私のせいではない)。咲いたことは咲いたが降るようには咲かなかった。しかし「堆肥を入れれば桜は元通り咲くそうです」と事務長から教えられた。兼松記念館前の枝垂れ桜は研究所の管轄である。よし、堆肥を入れよう。だが工事の見積額を聞き驚愕した。そこで、六甲台(法・経済・経営・国際協力・研究所)の五部局長会議で私が「研究所が半額払いますので、残りを四部局の等分をお願いできないでしょうか」と駄目元で頼んでみた。すると、議長の藤田誠一経済学研究所長が「これは五部局で等分しましょう」と提案し、他の部局長も即決で賛成して下さった。経費が節約できたことより、四部局長のご厚意が嬉しかった。翌2011年4月、枝垂れ桜は降るように咲いた。二度目は2016年4月。枝垂れ桜は全く咲かなかった。事務長も変わっていたので、私は所長でもないのに事務長に2010年の話をした。後日、工事の見積額が来た。何と2010年の半額。園芸の技術進歩を見た気がした。そして翌2017年4月、枝垂れ桜は期待通り甦った。だが安心はできない。同じ事が起こり続ければ、堆肥が効くのは5年。2022年に桜は咲かない計算になる。そこで、「2021年は枝垂れ桜の堆肥を忘れず入れて下さい」とこの場を借りてお願いする。枝垂れ桜の寿命は三百年だそう。研究所百周年にあたり、この枝垂れ桜が、二百年後の23世紀の神戸大学の教職員と学生、そしてどこかで見ているかつて研究所に在職した数百人の人々(と兼松記念館にいた猫)を春は降るような桜の花で癒してくれることを願っている。



GINGER

事務補佐員 眞方 志穂

ジンジャー。それは「社長」「御猫様」「猫氏」「野良氏」「館長先生」「理事長」等と敬意を込めて呼ばれ、多くの方に愛され親しまれた猫。鮮やかなオレンジと白の毛並み、ピンクの肉球、愛嬌のある仕草。十数年前キャンパスに住み着いて以来、六甲台の四季の移ろいを背景にいつも彼の姿があった。かつては孤高の野良の気配が漂っていたが、次第に人間との距離を縮め、ふかふかの毛並みを撫でながら皆様と和やかに「猫端会議」を開けるまでに。年を重ねるにつれて人間っぽさが増し、悠然と座る姿にはいつしか賢者を思わせる風格が備わっていた。2019年3月28日、稀有な生涯を全うして彼は天国へ旅立った。六甲台でこの偉大な猫と出会い少なからぬ日々を共に過ごせた僥倖に感謝している。

